

新渡戸稲造の武士道

先号の藤尾秀昭、近藤建両氏の文章に触発されて『武士道』を読み直した。最終章に「武士道は一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない。しかしその力は地上より滅びないである」とある。著者の予言は憲法改正や武士道に基く道徳教育が行われれば叶うかもしれないが…。

ケネディが作った鷹山ブーム

「国家がみなさんのために何が出来るかを問わないでほしい。みなさんが国家のために何が出来るかを問うてほしい」。

昭和三十六年（一九六一）一月のジョン・F・ケネディ大統領の就任演説の一節である。この第三十五代アメリカ合衆国大統領は世界中から注目され期待されたが、二年後の十一月に暗殺された。世界を落胆させた。

そのケネディがインタビュに答えて、「尊敬する日本人は上杉鷹山、私は鷹山から多くを学んだ」と言った。

当時鷹山の研究書や専門書、それと娯楽本位の小説はあったが、日本では忘れかけられていた。学生だった私は名前も知らなかった。もちろん中学高校の教科書にも出ていなかったと思う。

ケネディが言ったということ「それっ！」と鷹山ブームが起きた。雑誌、新聞が採りあげ、テレビニュースや小説が続々登場。テレビドラマにもなり、鷹山がその政策をまねたと言われる直江兼統（上杉家の家老で鷹山より一五〇年前の人）まで脚光をあげ、米沢が観光名所になった。

鷹山は倒産寸前の米沢藩を、石門心学の教えを忠実に実行し、儉約と殖産で財政再建して借金を減らした。鷹山は歴史に埋もれた人物のひとりになっていったであろう。それにしてもアメリカの大統領

に言われて、自国の偉人を見直すとは、いかにも日本人らしく、少し恥ずかしい。

ケネディ大統領はなぜ鷹山を知っていたか。新渡戸稲造の『武士道』を読んだからである。

『武士道』は明治三十三年（一九〇〇）にアメリカで出版された。新渡戸はこの本を外国人に日本を正しく理解してもらうため英文で書いた。後に英語以外の世界中の言語に翻訳されるが、当初は英文（日本で和文に翻訳されたのは明治四十一年（一九〇八）である。この本はアメリカ二十六代大統領セオドア・ルーズベルトが感動し、知人友人に配って勧めた。以来『武士道』は日本理解の参考書として欧米の政治家や知識人によく読まれた。

ケネディ大統領もこの本を熟読精読したのである。

余談だが、世界的に有名なこの本は日本では熟読精読する人が少ない。本を買ったが読み切らずに投

げ出す人が多い。理由は二つある。一つは新渡戸が引用するヘーゲルやスペンサーなどの思想家や世界の歴史上の人物があまりに多様で、歴史と哲学と文学についての広い知識がないとついていけない。

二つ目は英文からの翻訳なので和文（日本語本来の文法による文章）になっていない。いわゆる翻訳調の悪文である。たとえば、「切腹こそ名譽ある死に方である。この考えが（武士層に）流行して命を粗末にする軽率な切腹が増えた」であろう。日本人が日本語の文章を理解するのにくたびれてしまう。それで本を放り出す。著者は日本人なのだから和文の原本も書き残してほしかった。

経宮管理講座 330 染谷和巳

マリイ・エルキントン（後の新渡戸萬里子）と結婚した。マリイは夫の考えや行動（思想と風習）の一つ一つについて「どうして？」、「どうしてそうするのか？」と子供のように質問した。夫はその都度誠実に答えた。

そうした毎日を送っていたある日、学者から「キリスト教のような宗教がないのに日本ではどうやって道徳を教育するのか」と聞かれた。新渡戸は答えられなかった。

この二つがきっかけで新渡戸は自分が身につけている道徳がどこから来たのか考えた。考えた末に『武士道』にたどりつき、妻や学者の疑問に答えるためには武士道について語らねばならないと思つた（序文より）。

そして先号「致知」の藤尾秀昭氏が指摘したとおり、病氣療養中に一念発起して論文『武士道』を

書いた（序文より）。

武士道の二本の太い柱は義と仁である。新渡戸もこの順序で書いている。武士道の淵源は歴史に武士というプロの戦士が登場した時にさかのぼる。

だが江戸時代以前の武士道は全く別のものであった。

武士道は卑怯、臆病、偽善を嫌悪するが、戦後時代は国を守るため或いは自分が生き残るために権謀術数を用い、妻や子を人質にさし出しあるいは殺し、父親を捕えて追放したりが日常的に行われた。弱肉強食の世界の中に行われていた。武士層の掟は荒々しく血腥いものであった。

明治時代の日本の教育三大図書といえは、福澤諭吉の『西洋事情』、幸田露伴の小説『五重塔』、新渡戸稲造の『武士道』であろう。この三作はそのままそっくり学校の道徳の教科書にすればいいと思っている。

現実には絵画などの美術品が日本より欧米の美術館に多く蔵されていることからも解かるように、日本人は価値あるものの価値が判らず、いいものをどんどん捨ててきたし忘れ去って来た。

この三作は江戸時代の武士の子が「論語」を読み書きしたように、子供の時から何回も何回も読ませるのがいいと思う。

『武士道』は先に挙げた理由もあって、前二作よりも読まれず忘れられかけている。世界中で尊敬され愛読されているこの書が…。

明治維新の西郷隆盛などの英傑、乃木希典、東郷平八郎から昭和の軍人たちに引き継がれ、現在の有為の政治家や経営者の精神の支柱になっている。

と言いたいが、先号の近藤建氏の文にもあるとおり、勇気に裏付けられた義の行動は稀れとなり、寛容や思いやりから発する仁、すなわち武士の情けも瀕死の状態である。

「自分さえよければ」のアメリカ流個人主義が幅を利かせ、家庭内の暴力や殺人が増え、政治家や経営者にも自己抑制できず、欲望のままに振るまう非道徳人が目立つ。

人々は欠亡や不遇を我慢する精神をなくし、「俺にもよこせ」「支援しろ」「助けよ」と要求し、聞いてくれないければ「訴える」と叫ぶ。依存心ばかり強くなり、義も仁もどこかに吹っ飛ばしてしまつた。武士道復活の日は絶望的に遠い。

この道徳教科書が捨てられた

新渡戸稲造は第五章「仁、惻隱の心」で、上杉鷹山の「伝国の辞」の三つ目「国家人民のために立ち

たる君にして：」をあげて、当時の封建君主が暴虐専制をほしうまにしていなかったことを示した。よき君主は人民を思いやり、人民の意見を聞く。そうすれば人民は国を愛し、国のために働くことを惜しまないと説いた。

現代は義も仁も吹っ飛ばして

新渡戸は「武士道」の二本柱を義と仁と定義し、その順序で書いている。武士道の淵源は歴史に武士というプロの戦士が登場した時にさかのぼる。

だが江戸時代以前の武士道は全く別のものであった。

武士道は卑怯、臆病、偽善を嫌悪するが、戦後時代は国を守るため或いは自分が生き残るために権謀術数を用い、妻や子を人質にさし出しあるいは殺し、父親を捕えて追放したりが日常的に行われた。弱肉強食の世界の中に行われていた。武士層の掟は荒々しく血腥いものであった。

その武士の掟は江戸時代になって磨き込まれ光沢のある玉となつた。戦わない武士が平時に自己を律する「道」に変質したのである。この変質して完成した武士道はその後現在に至るまで武士、軍人、政治家、経営者が拠り所とする行動規範 になっている。